

# 「西小田原山浄瑠璃寺ノ図」について

丸尾佳二

はじめに

小田原山浄瑠璃寺は、南山城の東南端、奈良県境近くの、京都府相楽郡加茂町大字西小字札場四番地にある。日本現存唯一の九体阿彌陀堂<sup>(1)</sup>がのこされていることから、「九体寺」とも称される古刹である。

数多くの文化財を擁する浄瑠璃寺であるが、その寺号が人口に膾炙した<sup>(2)</sup>のは、何といてもアジア・太平洋戦争中の昭和十八年（一九四三）妻多恵とともにこの寺を訪れた堀辰雄の「大和路・信濃路」中の一編「浄瑠璃寺の春」<sup>(3)</sup>によってであろう。今日、浄瑠璃寺や、近くの岩船寺、鎌倉時代の優品を中心として点在する石仏群で知られる「当尾の里」<sup>(4)</sup>は、年間三五万人ほどが訪れる観光地ともなっている。

浄瑠璃寺の山門を入ると、眼前に宝池（堂前池）がせまる。池の中央

には中島がある。この宝池を挟んで、東に三重塔が西面し、西に本堂である九体阿彌陀堂が東面するという、藤原時代に盛行した浄土教信仰の伽藍配置をのこしている寺院であることは、周知のとおりである。本稿では、このほど発見され、同寺に寄贈された「西小田原山浄瑠璃寺ノ図」について、その紹介を兼ねて、若干の考察を加えたい。

## 一 浄瑠璃寺略史

浄瑠璃寺一帯は、古くは「小田原」と呼称された南都に程近い別業・別所地帯で、多くの寺庵が点在していた。十二世紀半ばに、随願寺（現在、麿寺）を中心とする「東小田原」、浄瑠璃寺を中心とする「西小田原」に分かれた。ちなみに、現在加茂町当尾地区にのこる大字名「東小上」「東小下」「西小」は、「東小田原」「西小田原」のそれ

それ名残と考えられている。また、浄瑠璃寺の山号「小田原山」は、「西小田原」によるものであることはいうまでもなからう。

しかし、浄瑠璃寺の草創については、明らかでない。天平十一年（七三九）、聖武天皇の勅願により、僧行基が開基とするもの（興福寺官務牒疏）や、天元年間（九七八）九八三）に、多田満仲が創建したとするもの（『雍州府志』巻之五寺院門下）などがあるが、いずれも確かではなく、浄瑠璃寺の歴史を語る根本史料である「浄瑠璃寺流記事」（以下、「流記事」と略記）の記事に頼るほかない。

「流記事」によれば、長和二年（一一三）に東小田原寺、永承二年（一四七）に西小田原寺が建立されたことある。東小田原寺は随願寺、西小田原寺は浄瑠璃寺のことである。そして、西小田原寺、すなわち浄瑠璃寺は、義明上人を本願に、阿知山大夫重頼を檀那として創建されたとしている。ただし、「流記事」の「当山建立年記事」の書出には「先本堂」とあるように、永承二年に建立された当初の本堂は、われわれが今日目にすることのできる九体阿弥陀堂ではない。

以下、「流記事」によりながら、浄瑠璃寺の寺観が整備されてゆくプロセスをみることにしよう。

嘉承二年（一一七）に、当時の本尊仏薬師如来坐像を西堂に移し、先本堂を壊して現在の本堂である九体阿弥陀堂を建立した。そして、久安二年（一一四六）食堂と釜屋ができ、久安六年には、関白藤原忠通の子で、興福寺一乘院門跡であった恵信が、苑池を掘り、庭石を立てて造園したのである。さらに、保元二年（一一五七）には、九体阿弥陀

堂が宝池の西岸に移建された。平治元年（一一五九）十万堂（秘密莊嚴院 真言堂）の上棟。つづいて、治承二年（一一七八）にいたり、鐘楼造立、京都の一条大宮の某寺から三重塔が移築されて、現在の浄瑠璃寺の浄土教信仰の伽藍配置が形成されたのである。

鎌倉時代に入ってから、浄瑠璃寺の寺観の整備は進められ、建仁三年（一一三三）、楼門（北門）・経蔵・閻伽井、貞応二年（一一三三）に南大門・西大門などが造営されている。加えて、その間の元久二年（一一二五）には、新たに石を立てたりして、庭園の修補がおこなわれている。応長元年（一一三二）に、護摩堂が造られる。

南北朝時代には、三重塔下と本堂正面に、それぞれ石灯籠が造立されている。

「流記事」は、文明七年（一四七五）で終わっているが、「浄瑠璃寺縁起」には、その後天正年間（一五七三）九二）に寺領が減少し、寺が衰微したことなどが記されている。

江戸時代初頭の浄瑠璃寺の様子については、寛永九年十一月廿三日付「山城国浄瑠璃寺書上写」に、

〔複製書〕  
寛永九年十一月廿三日 浄瑠璃寺

山城之国相楽郡

西小田原山 浄瑠璃寺

興福寺之末寺一乘院様御持也

知行一円無御座候、寺数拾六軒計

本堂 真言堂 塔 護摩堂

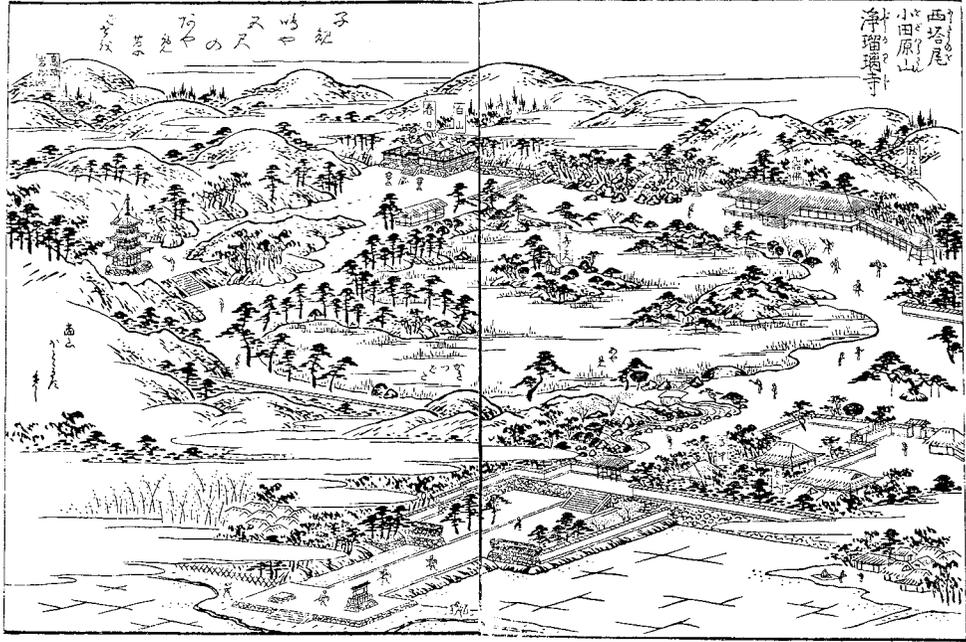


図1 近世中期の浄瑠璃寺の寺観（『拾遺都名所図会』巻之四前朱雀より）

鎮守 両社 清滝権現 (鐘楼)  
 弁才天 八社御座候 撞蔵 念仏堂 柵門

其外下末寺 東明寺 付本堂 塔 鎮守  
 西明寺 付本堂 鎮守

寛永九年霜月廿三日

葉師院

金剛院

判

判

興福寺

とあつて、寛永九年（一六三三）時点では、本堂・真言堂・三重塔・護摩堂・鎮守両社・鐘楼・念仏堂・楼門といった堂塔や、子院一六が存在していたことが判明するが、それ以外の堂塔がいつころなくなったのかは判然としない。「浄瑠璃寺縁起」によれば、康永二年（一三四三）に、南大門・十万堂・経蔵・西大門・僧房などを焼失したという。

二 絵図の伝来と記載内容

江戸時代中期の浄瑠璃寺の寺観を、ビジュアルに描いた資料として、つとによく知られていたのが、天明七年（一七八七）に刊行された『拾遺都名所図会』巻之四前朱雀の挿絵（図1）であり、北西方向からの鳥瞰図である。

ここに描かれた浄瑠璃寺境内の様子は、現在とほぼ同じであるが、仔細にみると、今はその区画のみがのこされている春日・白山の鎮守二社と拝殿がみられる。また、現在は山門の東南部にある鐘楼が、

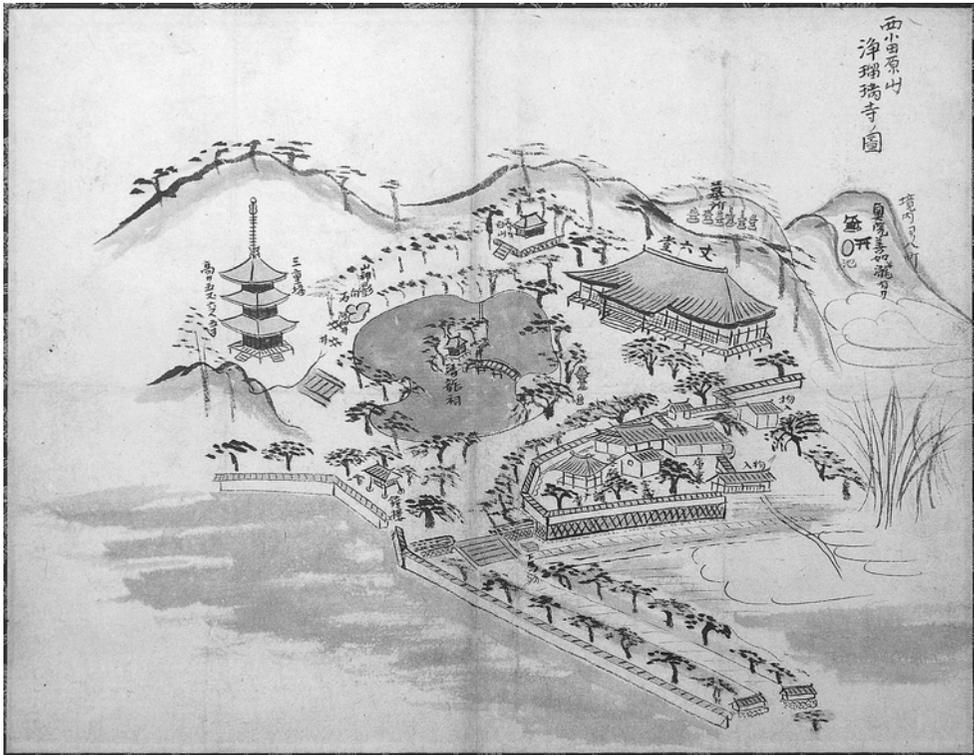


写真1 「西小田原山浄瑠璃寺ノ図」(浄瑠璃寺所蔵)

当時は本堂の北に廊伝いに建っていたことがわかる。さらに、昭和五十一年度(1976)に実施された名勝浄瑠璃寺庭園環境整備事業の際、池底に落ちた三枚の板石が検出され、中島南端と南対岸の間に架かっていた切石橋が復原されたが、様式手法からみて江戸時代前期ころのものと考えられているこの切石橋は、描かれていない。

『拾遺都名所図会』巻之四前朱雀の挿絵中には、「寺中」と注記された土塀に囲繞された一郭があり、大型の入母屋造茅葺の建物・小型で寄棟造茅葺の建物・茅葺の小舎が描かれている。建物の方位などに若干問題があるものの、大型建物を法雲院本坊、寄棟造茅葺建物を灌頂堂、寄棟造瓦葺建物を護摩堂に比定するのが妥当と考えられている<sup>(1)</sup>。

さて、このほど真言律宗西大寺の前管長で、久修園院(大阪府枚方市楠葉中之芝二丁目)の院主をつとめられていた松本實道氏の遺品の中から発見され、浄瑠璃寺に寄贈された「西小田原山浄瑠璃寺ノ図」(写真1)は、紙本著色、縦二四・三センチメートル、横三一・四センチメートルの二つ折りの絵図で、浄瑠璃寺境内を北東方向から俯瞰した鳥瞰図であり、受贈後掛幅装されている。昭和戦前期に浄瑠璃寺の住職をつとめ、のち久修園院の院主となられた高島真雄氏の旧蔵であったという<sup>(2)</sup>。落款は無く、制作年紀の記載が無いのが惜しまれる。

宝池を挟んで、東の高台に三重塔、西岸に丈六堂(本堂)を描き、



図2 浄瑠璃寺庭園実測図（整備後、『名勝浄瑠璃寺庭園環境整備事業報告書』より）

三重塔の南に阿伽井（閼伽井）など、丈六堂の南に春日・白山の鎮守社がみられる（ただし、鎮守社の社殿は、一棟しか描かれていない）。三重塔下の石灯籠は見出せないが、本堂正面には、石灯籠と、現在も池辺近くに置かれている永仁四年（一二九六）銘の石鉢が描き込まれている。宝池に浮かぶ中島には、清滝祠があり、その南端と南対岸の間には、『拾遺都名所図会』巻之四前朱雀の挿絵が書き落としていた切石橋が架かっている。丈六堂の背後には臺所があり、画面右奥には、「境内ヨリ八町」と注記された奥院がみえる。鐘楼は現位置と同じとみられるところにあるが、山門は描き込まれていない。

『拾遺都名所図会』巻之四前朱雀の挿絵中の「寺中」に対応する一郭には、おおむね東から西にかけて、護摩堂・宝蔵・客殿・庫裏と物入二棟が建ち並んでいる。

本図で注目されるのは、北出島から中島にかけて、橋脚二基に支えられた木造の反橋が架かっている点である。勾欄をつけ、板面を現わしているところから、土橋ではない。浄瑠璃寺庭園における反橋に関しては、先述の名勝浄瑠璃寺庭園環境整備事業の際の発掘調査でも、その遺構は検出されておらず、筆者も専断にて承知していない構造物でもあるので、今後検討していきたいと考えている。

ちなみに、浄瑠璃寺の南東方に位置する円成寺庭園(奈良県奈良市忍辱山町)の中島南側で、発掘調査によって反橋の橋材が検出されている。<sup>(13)</sup> 浄瑠璃寺庭園の場合、環境整備事業にもなう発掘調査は本図の発見以前であり、北出島と中島の間にはトレンチが入れられていないので、本図に描かれているように反橋で結ばれていたとすれば、橋杭などがそのまま池底にある可能性ものこっている(むろん、抜き取りもありうる)。

ところで、天正年間以後、浄瑠璃寺が衰微したことは前にみたおりだが、その古刹浄瑠璃寺において、伽藍の復興と維持の活動が活発になるのは、十七世紀後半からである。

なかでも、顕著な事例が本堂(九体阿弥陀堂)の屋根仕様の変更であった。桁行一一間、梁間四間の浄瑠璃寺本堂は、実はもとは三重塔と同様の檜皮葺の屋根であったが、近世に入ってその檜皮葺屋根の維持に相当苦しみ、ついに、十七世紀後半の寛文六年(一六六六)、屋根をそれまでの檜皮葺から、寄棟の本瓦葺に改造し、<sup>(14)</sup> さらには一間の向拝が付加されて、現在の姿になったのである。

このほかに、慶安五年(一六五二)に灌頂堂、元禄八年(一六九五)には仏殿が、それぞれ建立された。

やや時代が下るが、十九世紀初頭、享和三年(一八一三)の「当尾郷内寺社明細記写」<sup>(15)</sup>では、浄瑠璃寺に、本堂・三重宝塔・鎮守二社・同拝殿・泉水・楼門・清滝権現小宮・石塔・弁才天女社・奥ノ院小宮、境内には法雲院・多門院の二院が存在し、本堂(法雲院・多門院)・灌

頂堂・護摩堂・持仏堂があるとしている。

### 三 絵図の制作年代

話を「西小田原山浄瑠璃寺ノ図」に戻そう。

本図においては、三重塔や春日・白山の鎮守社と、丈六堂(本堂)や護摩堂・宝蔵・客殿・庫裏・物入・鐘樓の屋根の描き方には、明瞭に差違が認められる。したがって、前者は檜皮葺建物であり、後者は瓦葺建物とみなすのが妥当と思われる。

丈六堂(本堂)が瓦葺建物として描かれ、かつ向拝が付加されている点を勘案すると、本図の制作年代は、少なくとも寛文六年以前には遡りえないこととなる。

一方、制作年代の下限は、どうであろうか。明治二十九年(一八九六)五月十八日に、浄瑠璃寺の兼住職青柳義範代理律師丸山寶船、壇中惣代柳澤清治・岡本嘉十郎・岩倉猶松・廣中甚四郎が、京都府知事山田信道に差し出した「明細帳」<sup>(16)</sup>には、建物として本堂・護摩堂・三重塔・鐘樓堂・清滝権現祠・鎮守祠・奥ノ院ノ滝善如龍王祠・客殿・庫裏・宝蔵・土蔵・物入・門・浴室を挙げ、鎮守祠について「建物大破二及ヒ居候、吉間四面ニ再興セントス 吉ヶ所」と記されている。

本図には、春日・白山の鎮守社一棟がみられるところから、制作年代の下限は、明治二十九年ごろまでとみてよい。

したがって、本図の制作年代は、寛文六年から明治二十九年ごろまでのあいだと限定することが可能となろう。本図の制作年代を、より確定

していくためには、山門が描かれていない点や、護摩堂の存続時期などが手がかりとなるであろうが、今のところ今後の課題というほかはない。おわりに

以上、新出の「西小田原山浄瑠璃寺ノ図」についてみてきたが、従来浄瑠璃寺の寺観を描いたものとしては、『拾遺都名所図会』巻之四前朱雀の挿絵が知られていた。残念ながら年未詳ではあるが、新出の本図は、近世から近代における浄瑠璃寺境内の様子を克明に描写しており、『拾遺都名所図会』巻之四前朱雀の挿絵を補充する意味でも、貴重な絵画資料であるといえよう。

なお、掛幅装された本図は、今夏から、池袋西武百貨店を皮切りに、全国を巡回するテレビ朝日・朝日新聞社主催の「五木寛之の「百寺巡礼」展」奈良・北陸・京都編」に出陳されることになっている。

- (1) 十一世紀から十二世紀末 京都とその周辺、平泉、鎌倉などに、三棟余りの九体阿弥陀堂が建立されたことが知られている。福山敏男「九体阿弥陀堂について」、『大和古寺大観』第七巻海住山寺・岩船寺・浄瑠璃寺付録 岩波書店・一九七八) 参照。
- (2) 浄瑠璃寺庭園(特別名勝 史跡)、本堂一棟 三重塔一基、木造阿弥陀如来坐像九軀、木造四天王立像四軀(以上 国宝)、三重塔初重壁面板絵著色十六羅漢像一六面、木造地藏菩薩立像(子安地藏)一軀、木造薬師如来坐像一軀、木造地藏菩薩立像(延命地藏)一軀、厨子入木造吉祥天立像一軀、附吉祥天摺仏五九枚、革製厨子金具形残欠八片、木造馬頭観音立像一軀、木造不動明王及二童子立像三軀、石灯籠二基、浄瑠璃寺流記事一冊、附浄瑠璃寺縁起一卷(以上、重要文化財)、浄瑠璃寺奥之院不動明王立像磨崖仏一軀、絵仏供一一個(以上、京都府

登録文化財) ほか。

- (3) 初出時の題名は「浄瑠璃寺」(『婦人公論』二八 七 一九四三)。
- (4) 「当尾」の地名は、十四世紀末の明德五年二月廿八日付「豊後守貞頼山城国塔尾庄并康原三庄契約状案」(京都府立総合資料館所蔵東寺百合文書)、『大日本史料』第七編之一)に、「塔尾」とみえるのが初見である。
- (5) 芝野康之「小田原の寺々」(加茂町史編さん委員会編『加茂町史』第一巻古代・中世編 加茂町・一九八八) 参照。
- (6) 加茂町史編さん委員会編『加茂町史』第四巻資料編1 加茂町・一九九七ほか。
- (7) 註(6)前掲書。
- (8) 『春日大社文書』第五巻 一〇七二号。
- (9) 『新修京都叢書』第七巻。
- (10) 庭園文化研究所編『名勝浄瑠璃寺庭園環境整備事業報告書』 浄瑠璃寺・一九七七 二七・二八頁。
- (11) 福田敏朗・谷直樹・スタイナー紀美子「寺社の造形」(加茂町史編さん委員会編『加茂町史』第二巻近世編 加茂町・一九九一) 三七・三七三頁。
- (12) 佐伯快勝浄瑠璃寺住職のご教示による。
- (13) 庭園文化研究所編『名勝円成寺庭園環境整備事業報告書』 円成寺・一九七七 一八 二〇・二九頁、森蘊「庭園」(『日本史小百科』一九) 近藤出版社・一九八四 一七三頁。
- (14) 寛文六年三月吉祥日付本堂棟札(京都府教育庁文化財保護課編『国宝浄瑠璃寺本堂・三重塔修理工事報告書』 京都府教育委員会・一九六七)。
- (15) 岩船寺所蔵 註(6)前掲書。
- (16) 京都府立総合資料館所蔵相楽郡役所文書明治二十九年「古社寺調」。調査は、三部編綴されており、平面図と絵図(彩色)が添付されている。ただし、絵図のタッチは、「西小田原山浄瑠璃寺ノ図」とは異なる。

〔付記〕

資料原本調査につき、所蔵者である浄瑠璃寺の佐伯快勝住職・佐伯功勝副住職のご高配をいただいた。また、資料写真撮影につき、フォトグラフィアー中淳志氏のご協力を得た。記して、謝意を表したい。